

# 古隅田川ミステリー。

四季折々の自然とふれあえるのも川の魅力だが、歴史や地形に注目した「謎解き散歩」も面白い。地質学の専門家にお話をうかがいながら、古隅田川のミステリーに迫ってみた。さて、そこにはどんな発見が待っているか、さっそく出かけてみよう。

## 1 流れが逆だったってホント？



現在の古隅田川は大落古利根川へと注いでいるが(指さしているのが合流地点)、利根川東遷事業がスタートする以前は、逆に古利根川から古隅田川へと水が流れていた可能性がある。

## 3 かつての流路はどこ？

砂丘付近に広がる浜川戸遺跡では、弘安6年(1283)と刻まれた板石塔婆が発掘されたことから、鎌倉時代中頃以前の古隅田川は、南に大きく蛇行して流れていたと考えられる。



## 2 なぜ富士塚がここに？

春日部八幡神社に隣接する八幡公園には、高さ約13mの「富士塚」(写真)が造られている。これは川の氾濫と季節風によって生まれた砂丘の高まりを利用して江戸時代に造られた。

かつては流れが逆だった？  
古隅田川の謎を追って

今回、謎解きの案内役をお願いしたのは元春日部高校の地学教師で理学博士、現在は春日部市文化財保護審議委員を務める平社定夫さん。まずは大落古利根川と古隅田川の合流地点から歩き始めることにした。

「現在の古隅田川は元荒川から古利根川に向かって流れていますが、かつては逆に、古利根川から元荒川方面に流れていたのですよ」

えっ、水は高い所から低い所へと流れるはず。流れが逆だったということ、何らかの原因で、地面の高低差が逆転したということですか？

「いやいや、流れの方向を変えたのは、自然の力ではなく人間なのです。徳川家康の時代に始められた利根川東遷事業(※)がそのきっかけです。大規模な河川改修工事が行われ、古利根川は上流でせき止められ、滔々とした流れの大河は一変しました。そのため、二つの川をつないでいた古隅田川が逆流を始めたのです」

古隅田川はその後も人間の力によって、流れの方向だけでなく、流路も変化するようになったという。次に平社さんが案内してくれたのが、川から離れた場所に建つ春日部八幡神社。古隅田川とどんな関係があるというのだろうか。

## 砂丘の場所を調べれば かつての流路が分かる

「境内周辺の地表面に注目してみてください。神社周辺にはサラサラとした砂地がありますね。なぜこのような砂地があるか分かりますか？」

確かに、神社周辺は樹木が生い茂る鎮守の森のようではあるが、明らかに他の場所の地質とは異なる砂地の場所がある。

「これは本来川沿いに見られる特殊な地形で、川の蛇行部に上流から流れてきた砂が堆積し、それが冬の季節風によって吹き集められてできた砂丘(河畔砂丘と呼ばれる)なのです。砂丘は、昔の利根川に沿って分



## 4 暴れ川だった！

新方袋から南中曾根にかけての約1.5キロの区間には「古隅田公園遊歩道」が整備されている。これは昔の古隅田川の土手の上に作られたもので、現在の水の流れが土手の遙か内側にあるのを見ると、古隅田川がいかに大きかったのかがイメージできる。

## 5 江戸時代には？



古隅田公園の一角には元文2年(1737)に古隅田川に架けられた「やじま橋」(長さ5.4m)が移築されている。江戸中期にはすでに水量が減り、川幅も狭くなっていたようだ。



城殿宮橋付近から眺めた古隅田川。現在は緩やかなカーブを描きながら流れているが、かつてはこの先で右に大きく蛇行していたと思われる。

「他よりも一段高くなっている遊歩道があるこの場所は、もともと古隅田川の土手なのです。土手の間際まで川が流れていたことをイメージすると、昔の古隅田川がいかに大河だったかが想像できますね」

川の歴史を探ると、かつてそこに住んでいた人々の暮らしの様子も見えてくると平社さんは言う。

「どうすれば洪水を避けられるか、どうすれば川の水を利用できるか……。人間は川と絶えず対峙し関わってきた。そんな人間と川とのつながりに思いを馳せながら川辺を歩いてみると、見慣れた川も違ったものに見えてくるはずですよ」



春日部市教育委員会  
文化財保護審議委員  
平社 定夫さん

※利根川東遷事業=江戸幕府による大規模な河川改修工事。それまで東京湾に注いでいた利根川の河道を徐々に東に移し、銚子で太平洋に注ぐようにさまざまな川の付け替えが行われ、関東の河川レイアウトが大きく変わることになった。

八幡神社周辺に広がる「浜川戸河畔砂丘」。現在は樹木が生い茂る鎮守の森や公園へと変貌しているが、地表面をじっくり観察すると、さらさらとした砂地で覆われた場所であることが分かる。(県指定天然記念物)

